

大学の国際化 最前線

150年の歴史と新たな変革 本質を見極めることのできる人材を育成

神戸女学院大学
国際学部

伝統的な英語教育を生かし国際学部開設

美しくも荘厳な正門を潜り抜け、小高い丘を登った先に見える神戸女学院大学のキャンパス。12棟の建物は国の重要文化財に指定されており、歴史ある学び舎とキャンパスを囲む豊かな自然環境が、学生たちの学びを支えている。

創立150周年を迎える2025年に先駆け、神戸女学院大学は2024年4月に国際学部を新設する。

歴史的に英語教育に力を入れてきた文学部英文学科が前身となり、同学が得意とする英語教育の伝統的なカリキュラムや方針を引き継ぐ英語学科とあわせ、グローバル・スタディーズ学科を設置。グローバル企業や国際関係機関、国際NGOなどへの就職を想定し、英語をツールとしてさまざまな

課題を見つめ、自分に何ができるかを考え、解決に向けて動ける学生を育成することを目指す。

具体的には国内外でのフィールドワークを充実化。単位修得も可能とし、学内で得た知識を実践できる場を増やす。韓国やバングラデシュ、アフリカなど学生の関心に合わせて多様なフィールドが用意されている。さらに授業の99%が英語開講であり、海外の留学生も迎え、まるで国内留学のような環境下での生活ができる。新たに元国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に勤めていた教員を迎えるなど、指導教員からも新しい視点を学生に提供する。

周囲のために行動できる女性を目指して

国際学部長の白井由美子教授は、「入学当初とはみな別人のように輝いて巣立っていく」と学生たちについて語った。彼女たちは、学内外の活動に積極的に参加し、自信を高めていくのだという。

その一つが大阪アジア映画祭への協賛だ。映画祭は毎年3月上旬ごろに行われ、教員と有志学生たちが、2月から1カ月程の短い期間でバングラデシュ映画の日本語字幕

を制作する。2020年に初めて日本語字幕を手掛けた『メイド・イン・バングラデシュ』が、日本全国50以上の映画館で上映されたことは記憶にも新しい。この活動は今年で5年目となる。

学生たちは字幕を作る中で、バングラデシュの文化や歴史、現状課題を学ぶ。

字幕表現も教員と学生と議論しながら進めていく。今年家族の生活費を稼ぐため、男装して人力車（リキシャ）の引き手となる少女の物語『リキシャ・ガール』の字幕制作に携わっている。

学生たちの就職にも力を入れる同学について、白井学部長は仕事における能力的な部分だけではなく、「本質を見極める、真理とは何かを考えることができる人間性を持った学生が多い」ことが同学の特徴と語る。周りの人たちのために、自分に何ができるのかを考える「愛神愛隣」の精神をモットーとする同学での学びが、周囲を巻き込み社会で活躍できる学生を育てている。



英語をツールに世界で活躍する学生を目指す